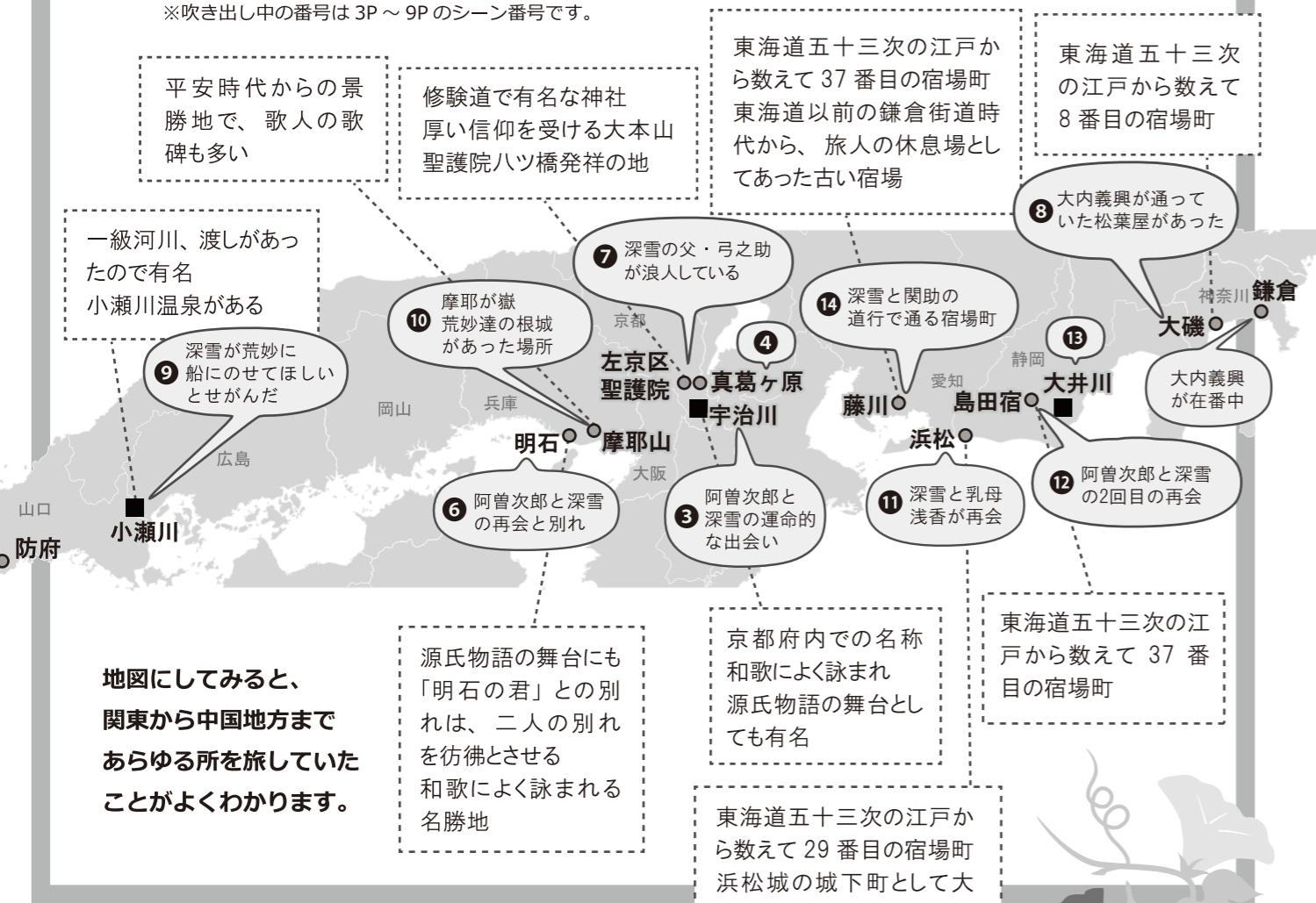




地図で見る生写朝顔話

阿曾次郎が仕える大内家は現在の山口県辺りの大名で、深雪の国許は芸州、現在の広島県あたりです。二人の出会いは京都でしたが、2回目の出会いは明石、さらに、3度目は静岡辺りにだつたりと、流転する二人の恋を際立たせるかのように、各地を名所案内のように訪ね歩きます。

※吹き出し中の番号は3P～9Pのシーン番号です。



◎参考書籍・ウェブサイト

- 絵金資料調査報告書
国立劇場四月歌舞伎公上演台本 生写朝顔話 五幕九場
文化デジタルライブラリー <https://www2.ntj.jac.go.jp/dglib/>
- 浄瑠璃名作集 上(有朋堂書店)
- 名作歌舞伎全集 第六巻 (東京創元社)
- 生写朝顔話 文楽公演 国立劇場上演資料集 152
近世後期における淡路人形座と大坂浄瑠璃界:『生写朝顔話』を例として 久堀 裕朗 著
人形浄瑠璃文楽名演集 生写朝顔話・花上野誉碑 NHK DVD
人形浄瑠璃 文楽 <http://www.lares.dti.ne.jp/~bunraku/index.html>
The Barbara Curtis Adachi Bunraku Collection <https://bunraku.library.columbia.edu/>
手習調 <http://tenaraityou.blog46.fc2.com/blog-entry-8.html>
文楽応援団 <http://bunrakuouendan.web.fc2.com/index.html>

絵金蔵 高知県香南市赤岡町 538



kingr



藏



絵金蔵公式ホームページ
<https://www.ekingura.com/>

よもやま話に花が咲く。えきんぐらがお届けする小ネタ袋。

蔵通信

四一号
2021.7

発行: 絵金蔵運営委員会

発行日: 2021年7月1日

〒781-5310 高知県香南市赤岡町 538

TEL/FAX 0887-57-7117

URL <https://www.ekingura.com>

絵
金
百
話

第四十話 「生写朝顔話」

流転の恋



令和3年度 絵金蔵夏の特別展
「絵金芝居絵紀行」

7月6日(火) - 7月25日(日)

白描展 6月29日(火) - 8月1日(日)
同時開催 5分の1展 6月29日(火) - 8月1日(日)

絵金百話

第40話 「生写朝顔話」

芝居絵屏風 高知市浦戸 浦戸西町内会所蔵

〈概要〉

高知市浦戸地区にある浦戸西町内会様所蔵の芝居絵屏風5隻は、それぞれ「生写朝顔話」を描いています。今回の蔵通信では、その5隻の作品を通じて、「生写朝顔話」をご紹介します。

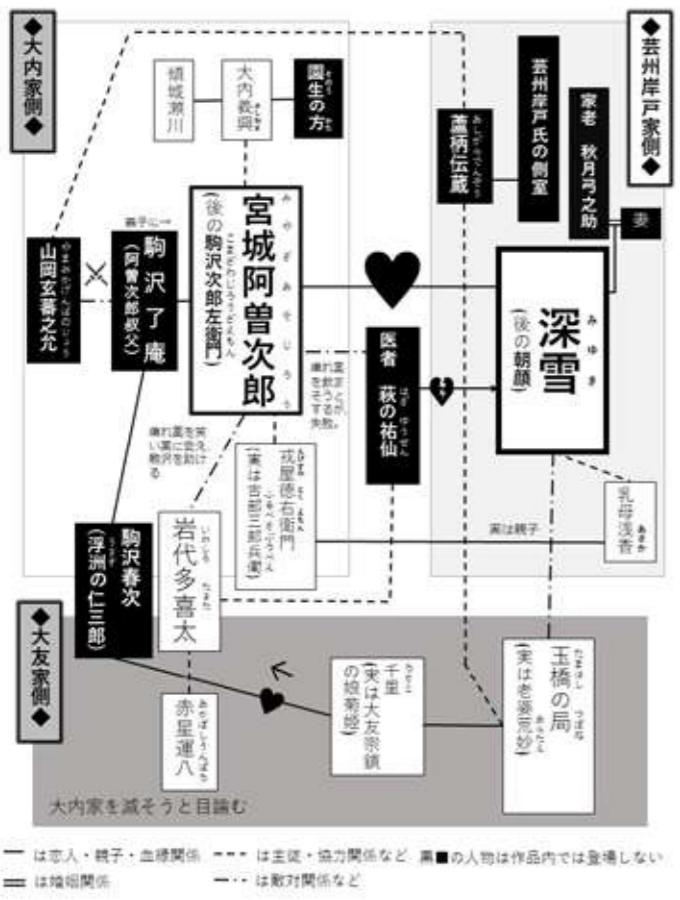
「生写朝顔話」は講釈師の司馬芝叟の長話「葬」を基にまず歌舞伎化され、その後、山田案山子（未完で没したが、翠松園主人が校補）の脚色で、浄瑠璃として1832年（天保三年）に「生写朝顔話」として初演された時代物の作品です。一般的には、浄瑠璃から歌舞伎化することが多いのですが、本作は成立が逆になっているという特徴があります。

現在は、お家騒動の背景はあまり描かれなくなり、大名大内家の武士で儒学を学ぶ宮城阿曾次郎（のちに駒沢次郎左衛門）と深雪（岸戸家の家老、秋月弓之助の娘で、のちに朝顔）の

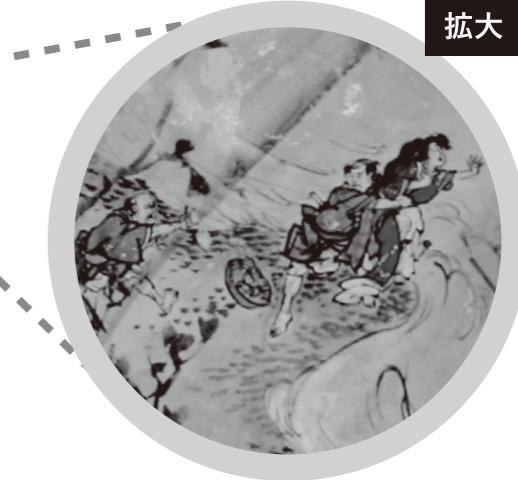
恋物語に焦点が当てられています。特に初めて二人が運命的に出会う「宇治川螢狩の段」、深雪だとわかつていながらも敵の手前、自分が阿曾次郎だと名乗れずにいるもどかしい場面「宿屋の段」、さらに、宿屋にいた男性が阿曾次郎だと気が付き、必死に追いかける深雪の姿が切ない「大井川の段」などは現在もよく上演されています。このようにこのお話の特徴は、最後まで2人の恋が“それ違い”をしつづける点です。「あと少しで…」など、見ているこちらはやきもきの連続。現在も恋が実るまでハラハラドキドキされるドラマや映画は人気がありますが、当時の人々も同じように一喜一憂したことでしょう。

登場人物達が繰り広げる「旅物語」にもご注目ください。

【登場人物相関図】



物語の詳しい内容は次項から▶



大井川に身投げしようとする深雪と、それを阻止しようとする関助らしき男。2人の背後には徳右衛門の姿も。

「生写朝顔話 宿屋」 浦戸西町内会蔵

⑬ 大井川の段

宿を出た次郎左衛門は、大井川を渡った。次郎左衛門に追いつきそうな深雪であったが、川は大雨のため通行できないことに。次郎左衛門に添うことができないことを苦に深雪が再び身投げしようとした矢先、追ってきた徳右衛門と、さらに追ってきた関助も現われる。関助と深雪、そして徳右衛門が話をしていくうちに、なんと浅香の父・三郎兵衛が徳右衛門であり、かつ弓之助に恩があることを明かし、いきなり切腹する。死にゆく中、徳右衛門は、次郎左衛門の薬と甲子の年生まれの自分の生血が深雪の目を治す役に立つことを伝える。深雪は感謝しながら飲むと、たちまち両目が開く。

⑭ 帰り咲吾妻の路草

深雪はすっかり昔の姿に。関助を伴って次郎左衛門を追いかける。島田から西に向かって旅をする道行の場面。

⑮ 駒沢上屋敷の段

大坂にある新築落成した駒沢の上屋敷に帰国途中の義興が多喜太を伴に立ち寄り、次郎左衛門が迎える。そこに深雪と関助が到着し、ようやく二人は再会を果たす。義興の許しを得て、二人の祝言の用意が進められる。と、そこへ春次が現れ、玄蕃から多喜太への内通の書状を見せ、さらに次郎左衛門からも自身が毒殺されかけたと明かす。やけになった多喜太は関助に斬りかかるが返り討ちに。関助は、その功により侍に取り立てられる。春次も駒沢了助と名を改め、大内家に再び仕えることに。御家は安泰となる大団円。

⑪ 浜松の段



「生写朝顔話 浜松小屋」 浦戸西町内会蔵

阿曾次郎恋しさに家を飛び出し彷徨う深雪は辛苦の余り盲目となり、とうとう乞食に身を落としている。街道を杖を突いて歩いていると偶然、乳母浅香が通りかかる。ずっと深雪を捜索していたが、しかしあまりの変わりように深雪だと気がつかず話しかける浅香。深雪も落ちぶれた身の上となったことを知られたくない、深雪らしき人は死んだため、帰るようにと伝える。浅香は悲しみに暮れながら、帰ろうとするが、何を思ったか、物陰に隠れる。すると深雪が、独り言で浅香に嘘をついたことを詫びていた。思わず浅香は物陰より出て、すがりつく。とそこへ悪漢が通りかかり、深雪を捕らえようとする。浅香は身を挺して戦い、悪漢・吉兵衛を倒すが、浅香は重傷を負い、この傷がもとで後に命を落してしまう。二人はなんとか浅香の親がいるという小夜の中山へ向かう。

⑫ 宿屋の段

義興の遊蕩を諫めることができ、京都に戻る道すがら次郎左衛門（阿曾次郎）は、島田宿（現在の静岡県島田市）の戎屋に宿泊する。そこに大内家乗っ取りを狙う多喜太も泊っている。そして、宿にはもう一人、多喜太と協力関係にあり、深雪を狙っている祐仙も泊っている。

多喜太は、祐仙に頼み、次郎左衛門をしびれ薬で暗殺しようとする。しかし宿の主人・徳右衛門の機転により、阻止される。宿の衝立にかつて深雪に書いて与えた扇が貼ってあるに気づいた次郎左衛門。その扇の持ち主の「朝顔」と名乗る瞽女（盲目の女性旅芸人）を呼び出すことに。なんと朝顔は深雪本人であった。多喜太が部屋を抜けたタイミングで、次郎左衛門は深雪宛への多額の金と目薬と扇を徳右衛門に頼んで宿を出発。徳右衛門が扇に書かれた名前を深雪に読み上げると、そこには次郎左衛門と阿曾次郎の名。深雪は次郎左衛門の後を追う。



芝居の解説

作品解説は、国立劇場小劇場で行われた第45回文楽公演の演目名と「淨瑠璃名作集 上（有朋堂書店）」を中心に、さらに「国立劇場四月歌舞伎公演上演台本 生写朝顔話 五幕九場」も参考しながら解説いたします。国立劇場四月歌舞伎公演上演台本 生写朝顔話 五幕九場は昭和48年4月上演の台本のため、絵金の時代と内容が多少異なる場合も考えられます。ご了承ください。

※「宇治川蟹狩の段」「大磯揚屋の段」「摩耶が嶽」「浜松小屋」「宿屋」以外の芝居絵屏風は現在確認できません。あらすじのみご紹介します。
※書籍の引用においては旧字体は新字体に変更しております。

① 大序 大内館

よしおき そうりん
鎮西探題大内義興は大友宗鎮を攻め滅ぼしたあと、大内家当主の座につき、いまは鎌倉に在番中。
そのう
国の留守を義母・園生の方が預かっている。

たまはし つばね
そこへ、朝廷から玉橋の局（実は偽者で、老婆・荒妙）が使いとしてやって来る。局をもてなすのは大内家家老・山岡玄蕃之允と大内家儒学師範・駒沢了庵。実は、山岡玄蕃、薬王樹を頂戴に来た老婆・荒妙や悪人・赤星運八、岩代多喜八たちと手を組んで、大内家から家宝を盗みだし、大内家を乗っ取ろうと画策している。

かた
局を騙る老婆・老妙は、「中宮が病気のため、大内家に伝わる薬王樹を借用したい」という。玄蕃の強い後押しもあり、園生の方は薬王樹を渡すことにして……。

ところで園生の息子・義興は鎌倉で遊蕩しており、義興を注意する家臣を手討にしているらしい。

了庵は、器量豊かな甥・宮城阿曾次郎を義興への帰国を促す使者に推挙する。しかし大内家を乗っ取りたい玄蕃は、義興を連れ戻す必要ないと取り合はない。悩んだ園生の方は、息子の遊蕩をそのままにできないと決意し、了庵は京都にいる甥・阿曾次郎をいちど国に呼び寄せ、鎌倉行を命じる。

クククッ…騙されおって



② 松原の段



たたら
夜の周防の多々羅浜。了庵の実子で勘当されて零落した駒沢春次が放浪中。この状況を悔いて、一旗揚げて駒沢家に戻り、大内家に再仕官したいと願っている。そこに不審な男が現れ、身を隠す春次。

なにやら乗り物に乗った老女とヒソヒソ密談をしている。盗み聞きすれば、その老女、大友家を再興し、あわよくば天下をわがものにしようと山岡玄蕃と画策して、大内家家宝・薬王樹を巧みに盗んだ荒妙であった。老婆達は「摩耶が嶽」へ行くという。「摩耶が嶽」へ向かう一行を春次は追うことになる……。



「生写朝顔話 宇治川螢狩」 浦戸西町内会蔵

雨のはらはらと降れかし」とつづくこの「朝顔の歌」は「朝露に匂う朝顔の花を太陽が照りつけて、枯れてしまう。村雨が振れば、花もしおれないのに。」との意味を持ち、深雪との別れを惜しみ、再会を望んでいる阿曾次郎の切なる想いがつづられている。この「朝顔」の歌が深雪の運命を大きく変えることになる。

③宇治川螢狩の段

京で儒学を学ぶ阿曾次郎が、宇治川で友人と短冊に歌を書いて螢狩を楽しんでいる。その短冊が風に飛ばされてしまい、近くの御座船に落ちる。御座船からは若い女性の唄が聞こえ、阿曾次郎はつい聞きほれてしまう。御座船で唄を楽しんでいる女性というのは、安芸国岸戸家の家老・秋月弓之助の娘・深雪たち一行。荒くれ者に襲われている御座船を阿曾次郎が助けたことで二人は恋に落ちる。しかし、二人の逢瀬は長くはつかない。阿曾次郎は叔父の了庵の命により、一度帰国をしたあと鎌倉に急がねばならない。

阿曾次郎は、扇に「露の干ぬ間の朝顔を、照らす日かけのつれなきに」の歌を残す。下の句に「哀れひと村



⑩摩耶が獄の段

関助らしき男が登場。荒妙の手下に襲われたが、返り討ちにしている様子。その後、関助は仁三郎のことを玄蕃へ注進しようとした伝蔵も討ち、深雪を探すために出立する。

「生写朝顔話 摩耶が獄」
浦戸西町内会蔵

老婆・荒妙は盗賊の頭領で、大内家を滅そうと、娘・千里たちと播磨国と摂津国との境にある摩耶が獄に潜伏している。そこにやって来るのは悪家老・山岡玄蕃に協力している蘆柄伝蔵で荒妙に密書を持ってきたという。密書の内容は、次郎左衛門があの薬王樹を奪い返そうとしている、というもの。

そんな中、「浮洲の仁三郎」として、盗賊の一昧と化し、荒妙の家に入りこんでいる駒沢春次は、大内家家宝である薬王樹を取り戻そうと千里が自分を慕っていることを利用する。仁三郎が薬王樹をとり戻そうとしている間に、深雪が摩耶が獄にやって来る。荒妙によって廓に売られていた深雪。廓勤めを嫌って店から度々逃げ出すため、廓の主人に突き返され、摩耶が獄の砦に戻って来たのだ。戻って来た深雪を折檻する手を止めて、盗賊仲間に呼ばれて出ていった荒妙の隙をつき、千里と仁三郎に助けられた深雪は再び摩耶が獄から逃げ落ちる。

任三郎から母である荒妙が謀反人であることを聞かされた千里は、仁三郎とは結ばれないことを悟り、自害する。千里の亡骸を見つけた老婆・荒妙は、千里は大友宗鎮の忘れ形身の菊姫であり、盗賊業もいざという時の資金集めだったことを打ち明け、千里の後を追って自害する。任三郎こと春次は取り戻した薬王樹を手に、山岡玄蕃を追及しようと摩耶が獄を後にする。

④真葛が原の段

深雪に惚れている医者・萩の祐仙は、深雪の実家・秋月家に入りする医者・立花桂庵に仲を取り持つてほしいと大金を贈る。すでに阿曾次郎と深雪の仲人をする計画があったが、大金に目が眩んだ桂庵は、祐仙を阿曾次郎と偽らせ、婿入りさせようとする。



偽者めっ！

えーー

おかざき ⑤岡崎の段



深雪の父・秋月弓之助は安芸国・岸戸家譜代の功臣であったが、主君が寵愛する側室の弟・蘆柄伝蔵をとり立て重臣にしたことを不服とし、かつ深雪を伝蔵に娶らせよとの命を断るため、京都の片隅で自ら浪人として暮らしている。そこに桂庵が、阿曾次郎と騙った医者・祐仙をつれてやって来る。弓之助とその妻は二人を迎えるが、すぐに偽者だと気が付き、追い出す。

そんな折、安芸国から使者が現れる。伝蔵の悪政で百姓が一揆を起こし、騒動を収束させるため、主君は弓之助を呼び戻したいと願っているという。すぐに弓之助は百姓一揆を鎮めるため、屋敷を引き払う。そこに事情を知らぬ本物の阿曾次郎が深雪を訪ねて来るが、祐仙と間違われて追い返され、深雪に会えぬまま仕方なく帰って行く。

あかし　ふなわか ⑥明石船別れの段

別の船でそれぞれ帰国する阿曾次郎と深雪は、明石の港で再会する。

深雪はうれしさのあまりに阿曾次郎の船に乗り移り、連れていってほしいとせがむ。しかし武士道が立たないからと深雪を自身の船に戻そうとする。そこで深雪は添うことができないと身投げすると嘆く。阿曾次郎はあまりの情熱に折れて、船に書置きを残して連れていこうと、一旦深雪を船に戻した途端、阿曾次郎の乗る船が急に出港してしまう。阿曾次郎は持っていた扇を、深雪の船に投げ入れ。二人はまたも引き離されてしまう。



いつしょにつれていって…

ゆみのすけ　やしき ⑦弓之助家舗の段

主君の命により一揆を鎮め、岸戸家に戻った深雪の父・弓之助。秋月家では、深雪が物思いにふけっている。そこに、蘆柄伝蔵が結婚をしたいと乗り込んでくる。深雪の母が伝蔵を追い返したところに弓之助が帰宅し、別の男との縁談話をはじめる。

縁談の相手は駒沢次郎左衛門（実は了庵の跡をついだ阿曾次郎）で、主君の仲人で婿に取らす話が決まっていた。

次郎左衛門が阿曾次郎のこととは知らず、深雪は阿曾次郎への想いを貫くため、身投げをするとの書置きを残し秋月家を飛び出す。秋月家は大慌てで、深雪を捜索するも甲斐なく、旅の苦労と阿曾次郎恋しさに泣き続けた深雪は盲目となってしまいながらも、阿曾次郎を求めてさまようことに……。



おおいそ あげや
⑧大磯揚屋の段

鎌倉在職中の大内義興は大磯の廊・松葉屋で遊女・瀬川と深い馴染みとなる。その日も義興は岩代多喜太、赤星運八などの取り巻きを引き連れて松葉屋を訪れている。そこへ義興を諫めるよう命を受けた駒沢次郎左衛門が到着する。次郎左衛門は瀬川を呼び、床の間の桜の花を見せて謎をかける。何かを察した瀬川は、夜更に次郎左衛門の寝所にやって来て、先ほどどの返事だと手紙を渡す。

瀬川と次郎左衛門の不義密通を疑った義興は、次郎左衛門にも切りかかるが、不義でない証拠として瀬川から受け取った手紙を差し出す。そこには、楊貴妃と玄宗の「馬嵬の別れ」の故事が記してあった。次郎左衛門はさきほど瀬

川に桜を示して、お家騒乱の原因となっている瀬川の命を貰うつもりだと謎をかけたところ、次郎左衛門の心を悟った瀬川はわざと義興の刃にかかったのだった。義興は瀬川の想いに改心を決意する。



「生写朝顔話 大磯揚屋」 浦戸西町内会蔵

こせわがわ
⑨小瀬川の段

場所は小瀬川（現在の広島県と山口県の県境の辺りを流れる川）。木村の親仁が、川に止めていた船の持ち主の老婆（実は荒妙）へ、乗せてほしいとお願いしている。その近くで、人買ひの姿が。たまたま深雪を見かけ、追いかけてきたが見失った二人。執拗に深雪を探している。絶望する深雪は、いつそひとりにと小瀬川の柳に帯をかけ死のうとする。それを止めた老婆が、深雪の恋人を探してやろうと言う。この言葉を信じ、思いとどまった矢先、人買ひが深雪を連れていこうとする。そこで老女は人買ひに金を与えて帰らせる。さらに深雪を探していた秋月家の家来・関助もやって来て、深雪を家に連れて帰ろうとするが、深雪は老婆の船に乗ってしまう。